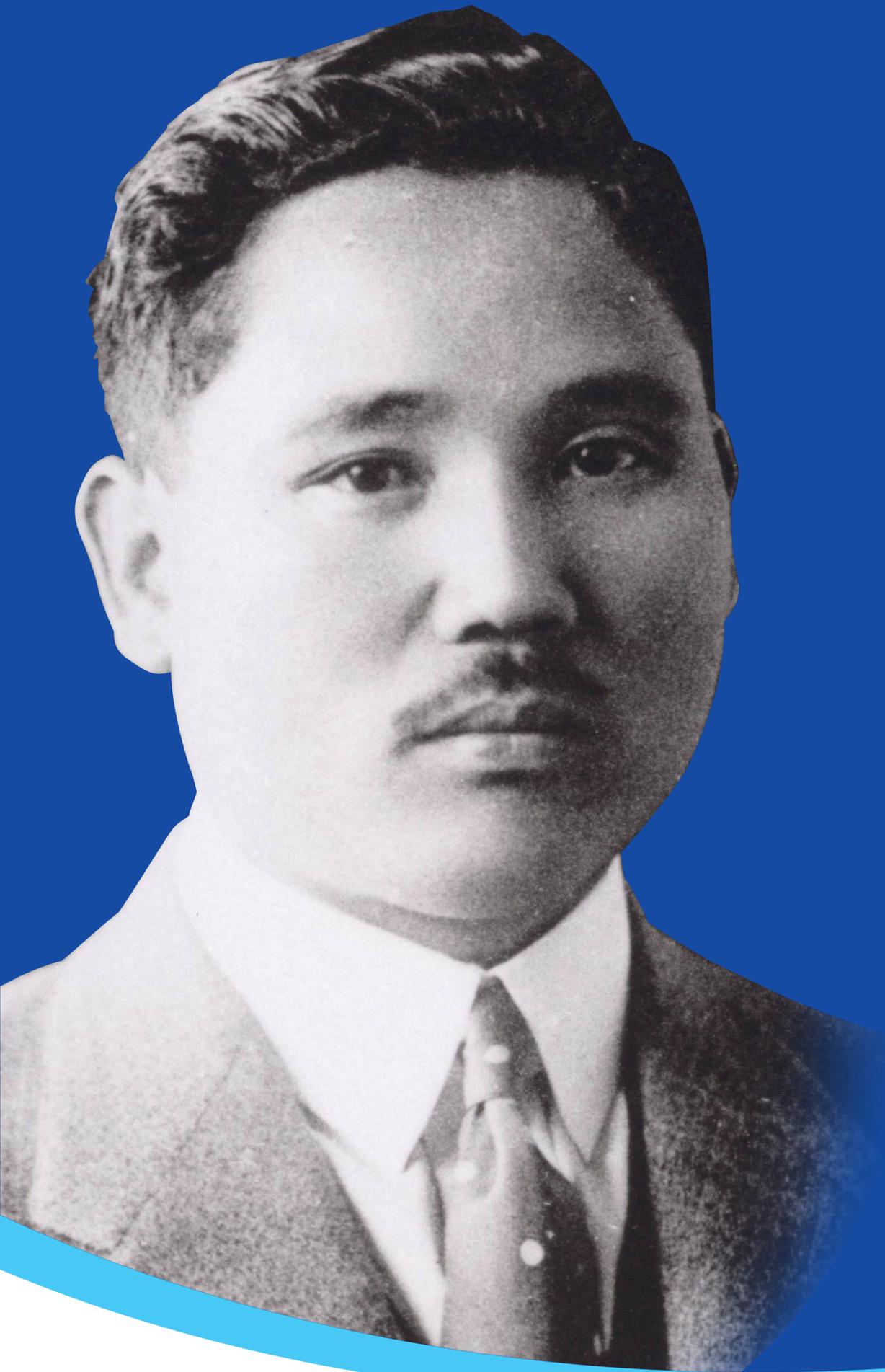


神奈川大学創立の祖

米田吉盛展

（創立者の足跡と神奈川大学の歩み）



教育は人を造るにあり



生いたち 修学時代



尋常小学校1年生ころの吉盛と祖母

米田吉盛は、1898（明治31）年11月10日、父・米田良吉と母・サヨシの長男として愛媛県喜多郡満穂村（現内子町）論田に生まれました。

家庭の事情により祖母のクマに育てられた吉盛は、満穂南尋常小学校を卒業すると、自分一人で生きていくことを決意します。まず京都の呉服屋で一年ほど丁稚奉公をし、第一次大戦後の景気に沸く台湾行きを決意、15歳で台湾に渡り台北の山本金物店で勤務、正規の学問をしようと給料を貯金して将来の学資のために備えました。

満20歳での徴兵検査で右目視力が弱く丙種合格（現役に適さない）となった米田は、学問を修めるために上京します。

東京での米田は、まず現在の新宿区四谷あたりの新聞販売店に住み込み、朝は新聞配達、昼は神田の正則英語学校と中学四年に編入するための予備校、夜は週三日の漢文塾へと通い、勉強を重ねました。その結果1919（大正8）年、攻玉社中学（旧制中学のため五年制）の四年に合格。喜んだ米田は一層勉学に力を注ぎました。そして引き続き学費を自分で稼ぎ、1923（大正12）年には弁護士を志望して中央大学専門部法学科への進学を果たしたのです。ここで米田は「辞達学会」という弁論部に入って積極的に活動し、また、憲法学等の研究に励みました。



辞達学会の弁論 演題幕に米田の名前が見える（1925年）[中央大学資料館事務室所蔵]

教育への思い

中正堅実な青年の育成

積 極 進 取
貞 実 剛 健
米田書

大学で学問を修め、また読書と思索を重ねるなかで、米田は「人生とは天分を開発して社会に貢献することにある」との思いを強くしました。そして、その実現のために「教育」への熱意をもつようになります。

1926 (大正 15) 年、米田は中央大学を卒業します。当時の社会状況は大正デモクラシーにともなう都市文化の形成や労働・農民運動の活発化の一方、治安維持法制定・社会諸運動の弾圧で混乱し不安定なものでした。これを目の当たりにした米田は、国家の中核となる「中正堅実」な国民を増やすことが急務との認識に至ります。そのためには、自分と志を同じくする青年を多く育てることが大きく社会に貢献できるのでは、と教育への思いを強くし、多くの学者の協力を得て学校造りを始めました。

教育者への道

29歳にして横浜専門学校を創立



横浜学院を開設した桜木会館
(1988年撮影)



米田とはじめての卒業生
(1931年)

1927 (昭和 2) 年、米田は初めての教育事業として、東京・神田で
巡査や看守に民事法学や刑事法学の概要を教える各種学校「武蔵学
園」を開設します。この経験を踏まえて、新たな学校を創立するこ
とを考えて情報収集に努めると共に周りの助言を得て、勤労青年が
多いにも関わらず夜学で法学を学べる高等教育機関のなかった横浜
に専門学校を創設することにします。

まず 1928 (昭和 3) 年、専門学校設立までの準備段階として横浜・
桜木町に「横浜学院」を開設。夜間部の法学科と商業経済科の
2 科が設置されました。そして同年 12 月、西戸部町富士塚 (現在の
境の谷公園) に移転し、翌 1929 (昭和 4) 年 3 月、専門学校令に基
づく「横浜専門学校」の設置が認可され、神奈川大学の歴史は本
格的なスタートを切りました。



境の谷公園にある神奈川大学発祥の地記念像
(この地で横浜専門学校が開校)

教育者への道

錚々たる顔ぶれの協力者たち



林 頼三郎

(1878—1958)

東京法学院（現・中央大学）卒。検事総長、大審院長、司法大臣、中央大学学長・総長等を歴任。横浜専門学校初代校長や財団監事として学校運営に協力した。



樋貝 詮三

(1890—1953)

京都帝国大学卒。恩給局長、保険院長官等を歴任。戦後初の衆議院議長となり、吉田茂内閣では国務大臣。物心両面で米田を支え、兄のような存在であった。



太田 哲三

(1889—1970)

東京高等商業学校卒。中央大学や東京商科大学（現・一橋大学）の教授を歴任。東京商科大学の優れた教員を米田に紹介、自らも講師として指導にあたった。

まだ若い米田の学校経営には、多くの協力者がいました。なかでも中央大学時代の恩師・林頼三郎や樋貝詮三、太田哲三はそれぞれ助言や物心両面、人材紹介などで米田を支えました。米田が父のように慕っていた林は、横浜専門学校の初代校長をつとめました。

また、横浜の財界人たちも資金を援助しています。

創立時の教員は、法律系が母校（中央大学）の教員と裁判官、商学系は東京商科大学（現 一橋大学）の教員が大半をつとめていました。優れた教員を集めることにこだわった米田の希望がかない、いずれも錚々たる顔ぶれでした。

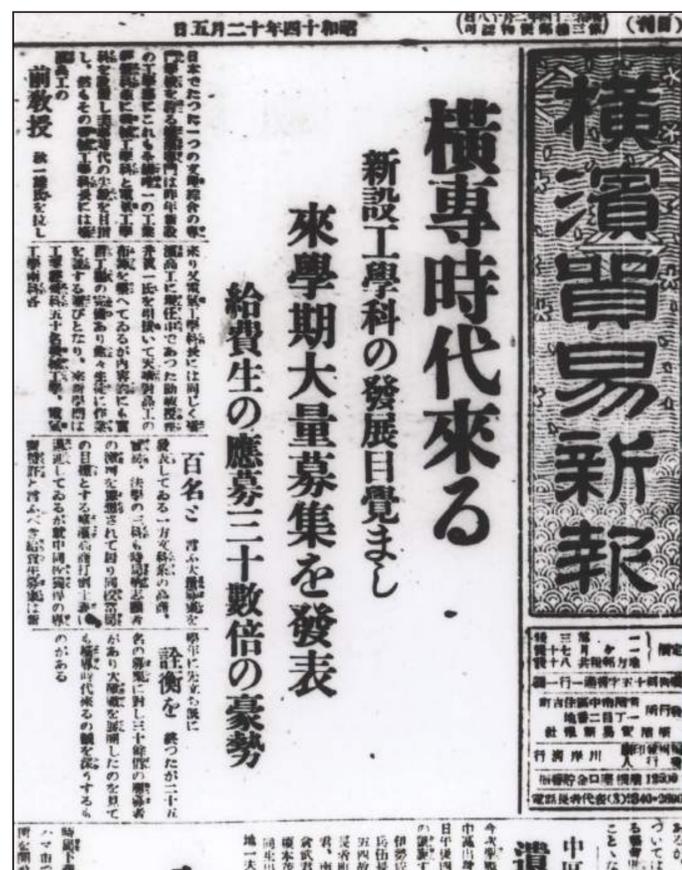
総合専門学校への取り組み ～六角橋への移転～



横浜専門学校全景（1937年）

さらなる学校の発展のために、米田は広い校地を探しました。ちょうどそのころ、横浜市電（路面電車）が開通して間もない横浜市神奈川区六角橋で横浜専門学校の誘致活動が行われ、これを受けて1930（昭和5）年に移転することになりました。現在の横浜キャンパスの誕生で、移転が完了した5月15日を創立記念日と制定しました。法学科・高等商業科・貿易科が設けられ、学生たちは勉学や学生生活に一層励みました。

1939（昭和14）年になると、工学三科（機械工学科・電気工学科・工業経営科）が米田やその協力者の尽力で開設されました。地方紙のなかで最有力の一つであった『横浜貿易新報』は、そうした横浜専門学校の充実ぶりを、給費生制度の反響とともに「日本でたった一つの文理総合の専門学校を誇る」と報じています。



横浜専門学校の充実を伝える新聞記事
『横浜貿易新報』1939年12月5日付

戦時下の横浜専門学校



横浜専門学校にて開催された学徒出陣壮行会（1943年）
出陣学徒を見送る米田が見える



（上）記念祭で航空研究会の展示を訪れた米田と林校長（1942年）（下）米田が出席したクラス会・於木更津（1943年）

工学三科を設け順調に発展していた横浜専門学校でしたが、学校が誕生した昭和初期という時代は、戦争が隣り合わせの社会でもありました。米田や学生たちは、そうした戦争を意識しながら学校生活に取り組んでいました。

戦局の悪化とともに行われた学徒勤労働員や学徒出陣は、学生にとって戦時下を象徴する大きな出来事です。

文系学生を対象に行われた学徒出陣ですが、当初、横浜専門学校の工業経営科は文系学科とみなされ徴集猶予の対象にはなりませんでした。学徒出陣が実施された1943（昭和18）年、衆議院議員をつとめていた米田は工業経営科が猶予されるよう陸軍にかけあい、その申し入れは通りましたが、戦争という時局に抵抗することは出来ず、横浜専門学校からも多くの学生が戦地に赴くことになりました。

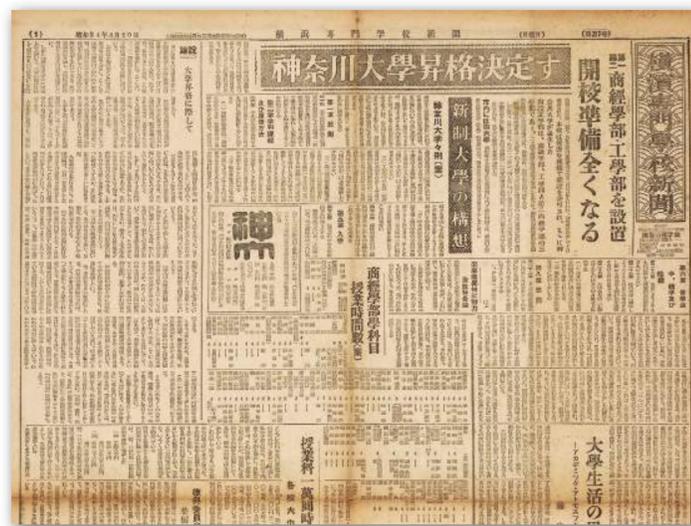
「神奈川大学」の誕生



学長として挨拶をする米田『神奈川大学通信』創刊号



新制大学には欠かせない図書館



(上) 神奈川大学の誕生を伝える『横浜専門学校新聞』1949年3月20日付 (下) 米田の所感を記した宮陵会関東支部会報第一号

戦後、林校長の公職追放処分により、米田が横浜専門学校の第二代校長に選ばれました。そして1947(昭和22)年、新たな学制が定められると、横浜専門学校は新制大学への昇格をめざします。

当初、横浜市内にあるいくつかの専門学校を合併・連合した「横浜総合大学」の構想も計画されましたが、横浜専門学校は結局、単独で新制大学に昇格することを決めます。

戦後の困難な時代状況のなか大学昇格運動は実り、1949(昭和24)年、「神奈川大学」が誕生しました。米田はここで初代学長となります。

神奈川大学の発展をめざして



施設も充実していく神奈川大学
木造校舎から鉄筋コンクリート校舎へ（1962年）

神奈川大学は、当初「横浜大学」の名称で新制大学の設置をめざしました。しかし、横浜市内の他の専門学校も「横浜」の地名を用いた大学を設けたく、校名の決着は容易にはつきませんでした。結局、学校の代表者による会談で決めることとなり、席上米田は、学生からも提案のあった「神奈川大学」とすることを宣言しました。こうして誕生したのが、神奈川大学のほか横浜国立大学、横浜市立大学でした。

1952（昭和 27）年に総工費 5 億円にのぼる「神奈川大学整備拡充計画」が発表されると、施設面の整備・拡充が本格化します。計画の見直しを経て 1955（昭和 30）年に竣工した 3 号館は、本学では最初の鉄筋コンクリート建築で「近代設備を誇る新校舎」と新聞紹介されるなどモダンな建物でした。



（上）神奈川大学校歌発表会 米田と作曲者高田三郎および作詞者神保光太郎（下）現存する校舎では最古となる 1956 年竣工の 5 号館（工学研究室）

教育重視・実学の神大

米田は、1965（昭和 40）年 11 月 1 日に開催された創立 37 周年記念式典の式辞で、「大学の在るべき姿」として、「大量教育を排す」「教育不在」を憂う」「大学本来の型」を語り、自身の求める大学像を示しました。

「大量教育を排す」では高度経済成長期の大学でみられたいわゆるマスプロ教育を批判し、「教育不在」を憂う」では責任ある教育の実施を力説します。そして「大学本来の型」として、大学は「学問を通して人間形成をする」ところであることをあらためて指摘し、研究に裏付けられた教育の必要を強調します。

こうした考えを背景に神奈川大学では、教育組織の拡充を図るとともに、少人数によるゼミナールや卒業研究を必修制として徹底するほか、クラス担任制度や専門学校以来貿易科で行ってきた語学を中心とした実学教育、大学院の開設等を進めていきました。



創立 37 周年記念式典での学長式辞
『神奈川大学報 第 75 号』（1965 年）



在学生父母との繋がりを強化して地方で父兄懇談会を開催
福島会場で挨拶する米田（1965 年）

政治家としての活動



愛媛県での選挙運動 米田と支援者

1942（昭和17）年、軍部に協力的な政治家による翼賛体制強化をねらう衆議院議員選挙が行われようとしていました。選挙に政府が介入することは公選精神に反すると考えた米田は、「翼賛政治体制協議会」の推薦を受けない「非推薦」候補として、自ら議員をめざします。愛媛で立候補した米田は、立候補者5名中三位で当選を果たしました。

その後米田は、戦後第一回となる1946（昭和21）年の衆議院議員選挙で破れますが、翌年、新憲法下での最初の選挙で当選し、主に文教委員として活動しました。

神奈川大学の学部、学科の増設をはかりその充実を目指す一方、1955（昭和30）年の総選挙では神奈川県でトップ当選を果たします。この任期中、岸信介内閣の厚生政務次官として活躍、次々回の総選挙でも当選し自民党政調会社会部長などで多忙を極めました。

1963（昭和38）年、体調が悪化した米田は政界を引退し大学の経営に専念することになります。



演説する米田（1955年）

晩年の米田吉盛



創立50周年記念新図書館落成式にて祝辞を述べる米田

1965（昭和40）年、神奈川大学に法学部、経済学部、外国語学部が誕生しました。法学部と経済学部は法経学部からの分離・独立、外国語学部は新設でした。そして既存の工学部を加えて、ここに神奈川大学は総合大学のかたちを整えました。さらに、1967（昭和42）年には、大学関係者が久しく待ち望んでいた法学、経済学、工学の大学院が設置され、教育・研究の環境が大きく整備・拡充されました。

米田の教育者への道はこれにて完成したと言ってよいでしょう。

その後、米田は時代のうねりに翻弄されたこともあり、大学を後進に託しました。しかし、大学への思いは終生変わらず、1978（昭和53）年、学校法人神奈川大学名誉理事長に就任しました。米田は、私学が受け持つ重要性を指摘し、大学の発展と運営方法に期待を寄せました。また、郷里内子町、とりわけ生誕した論田にも思いを通わせつづけ、1979（昭和54）年には内子町名誉町民に選ばれました。

きずな公園の開設

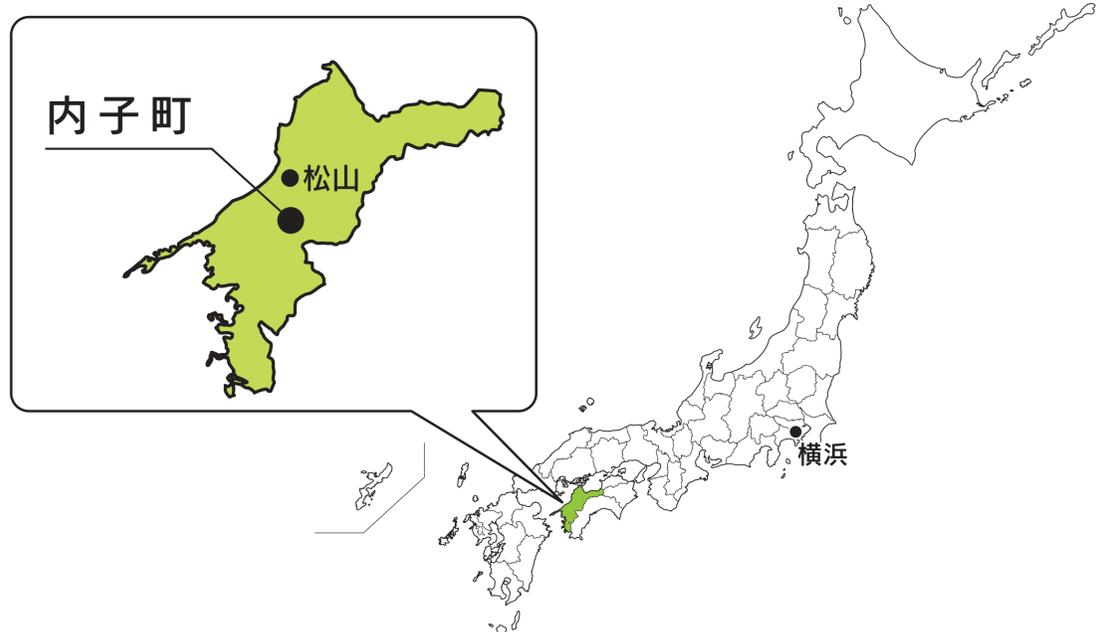


愛媛県・内子東自治センターに整備された神奈川大学創立者米田吉盛記念公園（「きずな公園」）



生家跡地の竹林を整備し、「生誕の地」の石碑を建立（内子町論田自治会 2018年）

米田吉盛の没後20年たった2007（平成19）年、神奈川大学では、創立80周年を記念して内子東自治センターに創立者米田吉盛記念公園をつくって町に寄贈することとし、11月19日に竣工式・除幕式・落成式がおこなわれました。内子町では町民からこの公園の愛称を募集し、応募114通の中から「きずな公園」が選ばれました。公園の中には米田家から寄贈された鍾乳石でできた灯籠や、神奈川大学宮陵会から寄贈されたヤマモミジが配され、中央の《米田吉盛先生之像》がふるさとの町を見つめています。



米田吉盛年譜

年	できごと
1898 (明治 31)	愛媛県喜多郡満穂村 (現 内子町) に生まれる (11月10日)
1926 (大正 15)	中央大学専門部法学科卒業
1928 (昭和 3)	横浜学院開設
1942 (昭和 17)	衆議院議員 (愛媛第一区) 当選
1947 (昭和 22)	横浜専門学校校長に就任
1949 (昭和 24)	神奈川大学学長に就任
1951 (昭和 26)	学校法人神奈川大学理事長に就任
1964 (昭和 39)	横浜文化賞受賞
1969 (昭和 44)	勲二等旭日重光章受章
1978 (昭和 53)	神奈川大学名誉理事長に就任
1979 (昭和 54)	内子町名誉町民となる
1987 (昭和 62)	永眠 (88歳) 正四位追贈
1998 (平成 10)	創立者米田吉盛先生生誕百年記念「墓前祭」・「偲ぶ会」開催 このとき命日 (5月17日) を「吉盛忌 <small>きっせい忌</small> 」と命名
2007 (平成 19)	創立者米田吉盛記念公園 (きずな公園・愛媛県内子町) 竣工
2010 (平成 22)	「米田吉盛教育奨学金」始まる
2017 (平成 29)	郷里内子町にて「米田吉盛展」を開催



横浜から世界へ、そして未来へ 100周年を迎える神奈川大学

学校法人神奈川大学は、2008（平成20）年5月に迎えた創立80周年を機に、創立100周年に向けて、学園全体としての「学校法人神奈川大学将来構想」を策定しました。創立者米田吉盛の意志であり、長きにわたり脈々と継承されてきた「建学の精神」をあらためて確認し、改革推進の指針となる「使命（ミッション）」「100周年に向けた将来像（ビジョン）」「学園の基本方針」「経営の方針」を明確に定めています。

そして、この将来構想を推進するにあたり、競争力を強化し、社会的ポジショニングを高め、魅力ある学園を構築することを目標に定められた「将来構想実行計画（2018-2028）」のもと、キャンパス新総合計画により、みなとみらい新キャンパスの開設、新学部の設置・既存学部の改組等魅力的な教育組織の構築、財政基盤の強化などが進められてきました。

創立100周年を4年後に控えた2024（令和6）年4月、学校法人神奈川大学は「将来構想実行計画」に基づき、2024年から5カ年の中期計画を策定しました。

創立者米田吉盛の教育理念である「教育は人を造るにあり」のもと、学生、生徒の成長を支援するため、研究に裏付けられた教育の質のより一層の向上に取り組むと共に、地域社会そして地球規模の課題を解決する、世界を惹きつけ、世界に発信する学園を目指します。

横浜から世界へ、そして未来へ。



横浜キャンパス



みなとみらいキャンパス



中山キャンパス（附属中・高等学校）

「中期計画（2024-2028）パンフレット」はこちらから



神大の足跡を辿る 神奈川大学史展示室



横浜キャンパス3号館内にある「ミュージアム commons」は、3つの展示室（大学史展示室、常民文化ミュージアム、企画展示室）と学習スペースおよび多目的に利用できるラウンジの3つのゾーンで構成されるスペース。このエリア全体を「ミュージアム commons」、ラウンジを創立者の名を冠した「米田吉盛記念ラウンジ」と名付け、展示を中心とした大学の歴史や研究成果の発信の場、それらを活用した学生や地域に開かれた学習・交流の場として活用されています。

神奈川大学史展示室

大学史展示室では、「学校をつくる」「学生生活」「教育と研究」を柱としたテーマごとの展示を行い、展示室が休室でも大学史の概略がわかるよう、展示室東側外壁に創立者米田吉盛と学校設立の協力者を紹介する壁面展示と創立者の胸像設置を行い、展示室出入口横には、神奈川大学の年表が設置されています。大学史展示室内にはコミュニケーションコーナーを設け、本学収蔵写真資料の投影や横浜専門学校当時の下宿の様子をイメージした再現展示を行うとともに、大学史関連情報の提供を行っています。

また、テーマを設定した展示や常設展示を補完する展示などを行うことができる特集展示コーナーを設け、様々な展示に対応しています。

- 所在地 神奈川大学横浜キャンパス3号館1階
- 開室時間 10:00～16:30（入場無料）
- 閉室日 日曜日、祝日、授業のない期間（夏季・冬季・春季休業）の土曜日
※ただし、祝日・大学所定の休日であっても授業日は開室

※みなとみらいキャンパス1階米田吉盛記念ホール前「神奈川大学歴史展示コーナー」も併せてご利用ください。